

## 第十七章 沈思と憂愁

昭和四十年（一九六五年）の正月、大平は選挙区向けの機関紙『東京だより』に「禍生得意、福育隠微」と題して次のように書いた。

「それにしても昨年は私にとつては大変な年でありました。暗い年ではありましたが、私の生涯にとつては大切な年でもありました。八月六日には長男正樹の死去に遭い、九月九日には池田前首相の入院、十月二十五日には池田さんの辞意表明、そして十一月九日には池田政権の閉幕と佐藤政権の開幕という不慮の出来ごとが相ついで生起し、その舞台回しに明け暮れた年でありました」。

同時に彼はこうしためぐり合わせに直面したさいの心構えにふれ、「時というのは不思議な構造をもっております。ちょうど川の流れのように、淀みなく静かに流れる時もあるれば、激流や急流となって荒れ狂うときもあります。その時の流れに棹さす人間としては、常に敬虔な気持と周到な注意をもつて、これに対処して誤りのないように心掛けることが大切であると存じます。何となれば禍というものは多くは得意の時に生じ、福というものは殆んど例外なく隠微の中に育まれるものですから……」と述懐した。

長男正樹の死からほぼ一年後の昭和四十年八月十三日、池田前首相が死去した。

前年十二月二日に退院したあと、静養生活に入った池田は、その後の経過がよく、四十年三月にはがんせ

ンターの久留院長が全快宣言を出すまでになつた。池田は安心して財界人の全快祝いに出席したり、一時は郷里の広島に帰る計画まで立てたりした。

そして、好敵手であり、また時に協力者でもあつた河野一郎が、七月七日に剝離性動脈瘤で急逝した葬儀に参列した池田は、「残念だつたらうな」と河野の死を悼んだ。

それから間もなく、七月十六日の定期診断で、咽喉のガンが再発していることがわかつた。「このまま放置すればひどく苦しまれる。体力と気力のあるうちに手術をすれば一年は生きられる」との医師団の判断にもとづいて、池田は七月二十九日、東大病院に入院、八月四日に手術を受けることとなつた。

「手術は成功した。あとは体力の回復を待ただけだ」との医師団の発表がある。

だが、池田の病状はその後悪化して昏睡状態をつづけ、十三日午後零時二十五分、ついに息を引きとつた。大平にとつて、大蔵省、政界を通じての父であり兄である池田の死は、言いようのない寂寥となつて襲いかかつてきた。彼は「もう何もかもいやになつた。生きていく望みを失つた」と、虚脱感をかくそうともしなかつた。

池田は、手術に先立つて、前尾繁三郎、大平正芳、鈴木善幸の三人を枕頭に呼んで後事を託した。

すでに前年十一月末、池田政権の後始末もついたころ、前尾は池田に呼ばれて、自分が宏池会を退いたときは、あとを引き受けてほしいと要請されていた。前尾は病身でもあり、資金能力にも不安があつたので、会長就任には躊躇があつたが、病床の池田からの話でもあり、これを引き受ける意思を池田に表明した。宏池会会長となることは、総理総裁の椅子を目ざすことにはかならない。前尾は健康の回復が第一と考え、この年（四十年）二月に宿痼の肋膜炎の手術を受けこれに成功していた。

宏池会は、前尾がリーダーとなり、長老の周東英雄が代表世話人として運営されることになつた。だが、派閥はそれまで政治家個人を中心に形成されており、その政治家が死もしくは何らかの理由で政界を去れば、

解散し再編成されるのがふつうであった。池田亡きあとの宏池会の存続は、自民党はじまって以来の派閥の継承であり、それだけに多くの困難があった。すでに池田政権末期に生じていた宏池会内部のかけりはその色を濃くし、前尾、大平の間にかつての一体感を取り戻されなかつた。それは、前尾を「兄貴、兄貴」と言つて慕つていた大平にとつても、大平を弟分と思つて可愛がつていた前尾にとつても、不幸な再スタートとなつた。

このことは、佐藤首相にとつては、奇貨とも言うべきものであつた。自分に対抗する最も強力な派閥の内部に亀裂が起こることは、自派の安定を保証するものにほかならない。以降、宏池会、そして前尾も大平も、苦しい道を歩まなければならなかつた。

正樹の死と池田の死、前尾との間の微妙な確執、そして佐藤政権からの疎外、この頃の心境を大平は、地元の後援会報にこう記した。「人の一生には悦びもあれば憂えもある。得意の朝もあれば、失意に沈む夕もある。栄光を浴びる場合もあれば、辱めに耐えねばならない局面もある」。大佛次郎の小説の題名をもじつて、「人生は『照る日』、曇る日』だよ」としきりに言つていたのも、この当時のことである。

この間佐藤首相は、首相就任八カ月目の昭和四十年六月に初めて自前の第一次佐藤第一次改造内閣をつくつたが、党内最大の実力者であつた河野一郎を切り捨て、旧池田派に対しては、前尾を総務会長に、鈴木善幸を厚生大臣に起用するなどの配慮を行い、人事の妙を發揮していた。反佐藤の大野伴睦はすでに亡く、さらに河野と池田があいついで死去したので、それらに伴つて派閥の分裂が生じ、党内には佐藤首相に反旗をひるがえす力のあるものは存在しなくなり、佐藤の党内運営は、旧岸派と旧吉田派の二つの勢力をうまくバランスさせることを要諦とするよつになつた。

大平はその年の二月に任せられた外交調査会副会長というあまりパツとしない肩書があるだけで、実質的には無役のままであった。

大平の不運に比べて、田中角栄は、とんとん拍子に出世街道を駆け上がり、四十年六月には蔵相から幹事長に就任し、佐藤政権の支柱のような存在となった。

翌四十一年八月の第一次佐藤第二次改造内閣組閣に当たって、佐藤首相から「党務をまかせる」と言われていた田中幹事長は、あらかじめ大平に対して政調会長を引き受けるように要請したが、大平は「ご好意はありがたいが、一体シャツポの方は大丈夫かね」と田中に疑念を呈した。案の定、「大平政調」に対しては、首相の「ノー」の判定が下り、大平は相変らず、無役にとめ置かれた。これにはさすがの大平も、心中穏やかならざるものがあつたらしい。その直後、私邸を訪れた新聞記者に対し、彼は不愉快な表情をかくそうとせず、「ボクはいま、佐藤さんのバランスシートをつくっているところだよ」と語った。

旧池田派では、前尾が総務会長から北海道開発庁長官という閑職へ回り、そのあとに福永健司が就任した。鈴木厚相は留任、参議院から塩見俊二が自治相に入った。

こうした状況の中で、昭和四十一年十二月の自民党総裁公選期を迎えた。強力なライバルがない以上佐藤の再選は確実だが、宏池会内部ではどのような出方をとるかが論議の的となった。池田路線の踏襲をうたつたはずの佐藤政権であつたが、人事で旧池田勢力を分断しただけでなく、政権最初の第四十八回通常国会で「L.O条約や日韓条約の批准を強行し、またこの年、四十一年の第五十一回通常国会で、党提案の建国記念の日を含む国民祝日法案を可決するなど、強い姿勢を押し出しはじめていたからである。

旧池田派内には、若手を中心として佐藤政権のこのような政治姿勢に反発すると同時に、「総裁候補」を擁する派閥として前尾の正式出馬を求める声があがり始めていた。だが派内の一方には、佐藤は旧吉田の同根であるため、あえて楯つくような行動に出るべきではないとするグループもあつた。そこで、周東、大平を

中心に幹部が協議を重ねた末、建前は自由投票だが、事実上、かたまつた形で前尾に投票しようという空気が生まれた。

十二月一日の党大会で行われた投票の結果、佐藤は、投票総数四百五十九票、有効投票四百五十票のうち、二百八十九票を得て再選された。

出馬表明しなかつた前尾は、対抗出馬した藤山愛一郎の八十九票について、四十七票をとり、ほかに二十五票が出た。これら合計百六十一票の批判票は、投票総数の三分の一を超えて、佐藤政権にゆさぶりをかけた。しかし、佐藤はこのあとの役員人事で、幹事長に福田赳夫、総務会長に椎名悦三郎、政調会長に西村直己と、佐藤、岸派で三役を独占する体制を採った。

これに先だつ四十一年十一月五日、大平は長年住みなれた団子坂に近い文京区駒込林町の家を引き払った。正樹とともに暮し、正樹が息を引き取つた家にはもはや住みたくない。大平夫妻は、まだ緑の多い世田谷区瀬田の高台にある新居に移った。

居は気移すというが、新居に移つた大平は、折からの無役の気楽さもあつて、読書と原稿執筆に時間を割くことが多くなつた。いわば「充電」の時を迎えたのである。月に二度か三度は立ち寄っていた虎ノ門の書店に足を運ぶ回数も目立って増えた。

「本屋の書架で私の足を止めさせるところは政治、経済、法律等とかがおいてあるところというよりは、むしろ、歴史、社会、随筆等の書架である。そこに毎週新たに持ち込まれる新刊書の新鮮な香りと、それを手にした柔かい触覚はたまらなくうれしいものである。生きる喜びを味わうことができる瞬間である」。

ここには、重なる不運の中で、読書三昧に浮世のうさばらしを求めている大平の姿がうかがわれる。

同じ文章の中で大平は、読書の効用について、「(それは)文章の彫琢錬磨にあるのではなく、みずからの

生活実践の光明を見出すものである」と述べているが、そういう本人は執筆にも熱心であった。四十一年十月には、「長男正樹の思い出」や、池田政権の回想などを収めた随筆集『春風秋雨』が、出版された。三十一年の『素顔の代議士』出版以来、十年ぶりのことである。

ちょうどこの頃、次男の裕が結婚し、大平家には跡継ぎができたことで、明るい空気に包まれることになった。裕は慶応義塾大学を卒業して古河電気工業海外事業部に勤務していたが、聖心女子大に在学中の遠藤福雄の次女公子を見そめて、縁談をすすめていた。公子の卒業を待つて春に婚約がととのい、四十一年十月十四日、ホテルオークラで結婚式をあげた。大平の新著は、裕と公子の結婚を記念して出版され、「この小著を池田勇人先生と長男正樹の霊に捧ぐ」という献辞が記された。

佐藤首相は、その後も強気の政局運営を進めていたが、一製糖会社グループが政府機関から不正融資を受けたという、いわゆる「黒い霧」問題で苦しい局面に立たされた。そこで四十一年末の十二月二十七日に衆議院の解散に踏み切り、年末年始をはさんだ選挙となった。一月二十九日の第三十一回衆議院議員総選挙では党員の危機感からくる選挙努力もあって、自民党は予想されたほど議席を減らさなかったが、得票率は四八・八%と結党以来はじめて五〇%を割った。選挙後の第二次佐藤内閣には、宏池会から官房長官に福永健司、経企庁長官に宮沢喜一が入った。

三年前の総選挙で外務大臣でありながらトップの座を譲った苦い経験から、後援会組織の建て直しを図っていた大平は、今度は二位に二万五千票の差をつけ、七万五千票という香川二区はじまって以来の大量得票で七回目の当選を果たした。

この年（昭和四十二年）二月七日には、郷土そして大蔵省の大先輩であり恩人である津島寿一元蔵相が死去し、さらに十月二十日には、吉田茂元首相が八十九歳の高寿で他界した。親しかった人々は次々とこの世

を去って行く。大平は無役の生活を送りながら、しみじみと世の中の無常を感じたにちがいない。そんな自分の気持ちを引き立てる意味もあってか、大平は、しばしば周囲のものに「人間というものは、閑職にあるときこそ勉強できるし、人との交際も密になって、いろいろと得るところが多い。栄光の座にいることは華やかなようだ、実質的にあまり得るところがない」とその心境を述べていた。

四十二年八月二十一日の日付のある文章には次のような感慨を記してもいる。

「山に登るには仄路に耐えねばならぬ。雪見をするには危橋を踏み越えなければその醍醐味は味わえぬ。確かにそれらはそれぞれ思い当たる節々がある。……私は柄にもなく、丸四年の間、政府の仕事をした。それは来る日も来る日も、時間の枠にはめられたストレスの連続であり、深くものを考えるいとまもなく、その場合々々におけるいわば『出たとこ勝負』の繰り返しであった。……政府を退いておる今日と雖も、閑雲野鶴を楽しむ程の暇はもとよりのない。それにしても、政治の舞台で主役を演ずる人々の心理なり演技なりを一定の距離をおいて觀賞することもできる。悪口や、ゼラシーの燃焼する場所から遠ざかることもできる。それよりも何よりも自分というものを、世間というものを、割合い均衡のとれた状態で客観視することができぬ」。

政権三年目を迎え、『黒い霧』問題で危うかった総選挙を乗り切った佐藤内閣は、いよいよ自らが政治課題として掲げる沖繩・小笠原返還に本格的に取り組みはじめた。

四十二年十一月十四、十六日の両日にワシントンで行われた佐藤首相とジョンソン米大統領との会談で、「二年内に沖繩返還の時期について合意すべきであること」、「小笠原諸島は一年以内に返還すること」が決まった。

その帰途、ハワイのホノルルで記者会見した佐藤首相は、帰国早々、党、内閣の改造人事を断行し、挙党

体制を樹立することをほのめかす。一年後の四十三年末に行われる自民党総裁公選で三選を果たすと同時に、沖繩返還交渉を強力に進めたいと考えたのである。このころ田中角栄ら主流派の有力者は、新聞記者らに、「大平正芳、中曽根康弘の両氏を起用すれば、今度の改造は成功だ」と語り、人事の焦点を示唆した。

昭和四十三年の佐藤三選に対抗出馬するのではないかとみられていた実力者は、三木武夫と前尾繁三郎であった。このうち、三木は外相として留任のハラを固めていたが、前尾はいかなるポストにもつかず総裁選をめざして体制固めを図ることとした。佐藤首相は、三年間無役であった大平の三役入りを要請した。

だが、大平の心境は複雑であった。一年半ほど前の昭和四十一年夏の改造人事のさいに、田中幹事長のもとにおける「大平政調会長」については「ノー」を出しておきながら、福田幹事長とのコンビの形でなら政調会長をやらしてもよいという、「人事の佐藤」らしいやり方に対してである。同時にこれは、佐藤首相にとって、一年後に予定される総裁公選に前尾が出馬する場合、大平を三役にしておけば十分な支援活動ができなかるう、ということを見込んだ措置でもあった。大平は前尾とはもちろん、田中とも協議を重ねたが、「保守本流の前尾派は三役の一角を確保すべきである」という派内の強い意向や田中のすすめによって、結局これを受諾することになった。

十一月二十五日に行われた第二次佐藤第一次改造人事の結果、党三役は福田幹事長が留任したほか、橋本登美三郎が総務会長、大平が政調会長となり、中曽根康弘は運輸相として入閣した。前幹事長の田中角栄はこの改造人事で無役にとどまったが、マスコミ等の間では、これは田中を要職につければ、またしても大平田中ラインが台頭してくることを警戒した佐藤首相の深謀だ、と受け取る向きが多かった。なお、この時の組閣で、宏池会からの入閣は、労相に小川平二、経企長官に宮沢喜一（留任）である。

こうして大平は、昭和三十九年十一月の池田退陣以来三年ぶりに、自民党の三役の一人として再び政界の

表舞台上に登場した。

就任直後、記者のインタビュアーに答えて、大平は政調会長就任の抱負をこう語っている。

「第一、謙虚に行くこと。日本をとりまく内外の環境はきわめて複雑であり、経済の規模も見違えるほど大きくなっているので、柔軟に対処しようと思う。」

第二、先入観にとらわれず、すなおに、かつ長期的にもものを見ていきたい。

第三、前向きに前進するばかりが能ではない。いままでやったことを回顧して、害を除くという再検討も必要と思う。

第四、論議を尽くすこと。これは政府、与党間だけでなく、野党とも国民とも十分な対話を持ちたい。リベラルな雰囲気の中で、政策を实らせる素地をつくる。私には派手な旗じるしのようなものは柄に合わない」。さらに、同じインタビュアーの中で「池田内閣と違い、佐藤内閣でのむずかしい立場で思う存分に腕をふるえるか」の質問に、「もちろん、自分の考えがスイスイ通るのは望ましいが、いつもそんな具合には問屋が卸すまい。ハードルにぶつかることを気にしないで、やってみようと思う」と答えている。

政調会長として大平が取り組んだ最も大きな課題は、財政硬直化にどう取り組むかという点である。当時の大蔵省首脳は水田三喜男蔵相、村上幸太郎次官（のち参議院議員）であったが、村上次官は三日にあげず政調会長室に詰めかけ、「おトウちゃん、いまのうちに財政を何とかせんと、えらいことになりますよ。赤字また赤字のコメ、国鉄、健保をはじめ、硬直化要因をいまにして取り去っておかなくては」と訴えた。

この問題に対する大平政調会長の見解は次のとおりであった。

「大蔵省の警告を軽視してはならない。われわれは真面目に取り組む必要がある。その第一は大蔵省が『当然増』としてあげた数字自体の吟味である。第二は明年度における財政規模はどの程度のものであるべきか、

という問題だろう。そして、何といつても日本経済の成長を将来に向かつてどう評価するか、そして、その展望に立つて財政をどのように位置づけるか、という長期的視野をハッキリさせることが、この硬直化問題をとり上げる前提でなければならぬ。

さらに昭和四十三年一月三十日の衆議院本会議で、代表質問に立つた大平政調会長は次のように述べた。

「硬直化要因を仔細に検討すると、その禍根は財政金融の分野にとどまらず、広く制度や慣行の中に深くその根を下していることが判然とする。……政府の機能が、時代の推移と共に、益々分化する傾向にあることも、これを是認する。しかし、それらの一切の制度や慣行は、財政力の限界内において、時代の要求にキビキビ対応することが要求されていると思う。今日の日本財政はそれが供給しうる栄養分を超える機構と要員と機能を担っており、真の解決の要論は、いうまでもなく政府の勇断であり、これを理解し受容するであろう国民の英知でもある。もはや国民は甘い迎合的な政治の姿勢に顔をそむけつつあると私は考える。私は政府に対し、真実は真実としてこれを国民に伝え、困難は困難として、これを国民に訴える素直な態度を要求する」。

大平政調会長の行政改革に関するこの指摘は、鋭い先見性にみちていたものと言わなければならない。

内政における重要課題が財政硬直化であったのに対し、当時の外交上の重要課題は、沖縄返還交渉とこれに関連した核政策、ベトナム問題などであった。アジア情勢、核政策の変化、日米協力関係の緊密化が進む中で、時間をかけながら沖縄返還問題解決の方途をさぐるうとした池田政権にくらべ、佐藤政権のそれは、「沖縄の復帰なくして日本の戦後は終わらない」という有名な佐藤首相発言に示されるように、いわば直線的なものだった。

大平はもともとこの問題について、「年月が経過すれば米国は沖縄を返すであろう」との確信に立ち、早い

時期に返還要求を米国につきつけることは「核兵器体系が漸次、ICBM、ポラリス潜水艦中心になり、沖繩のようなどころにある核基地が不要になってくるならば別として、核基地を含む返還交渉も十分考究しなければならぬ課題となろう」との認識を持っていた。ものごとが熟さぬうちに早く返せという論議を出せば、米側が核つき返還とか、何か他の問題との取引を持ち出し、そのことが国内政治に八ネ返って激しい論争になりかねない。大平はそういう懸念を抱いていたのである。

結果的には、四年の歳月をかけたあと、米側が昭和四十七年五月十五日に沖繩を核抜きで返還した。大平の懸念は一面では杞憂に終わり、また別の面では的中したと言えよう。

さらにこの代表質問では、大平と佐藤との間に、核政策についての問答も行われている。この中で大平はまず、「好むと好まざるにかかわらず、核問題はこれからの政治が取り組まなければならない最大の課題になろう」と指摘したあと、「核に対する正確な知識の摂取に日本がアレルギー的であつてよい道理はない」と述べており、非核三原則の第三項（持ち込ませず）の解釈と運用について、日米安保条約との関連で、大平が政府の事なかれの態度に疑問を抱きつつつけていたことを示している。

大平が政調会長在任中、田中角栄は、都市調査会長として都市問題に取り組み、のちに政権を目指すさいのスローガンとした『日本列島改造論』の基礎固めを行うかたわら、米価調査会長としてコメの問題と取り組んでいた。四十三年七月の米価シーズンのころ、生産者米価をめぐる党内論議が紛糾したさい、大平政調会長が事態を收拾に導いたエピソードを、田中はあちまじこう綴っている。

四十三年産米の生産者米価の引上げをめぐつて論議が沸騰、総務会では米価引上げを求める農林議員の厳しい発言が相ついで出されていた。ある日、二人の総務がこもこも立って、「わが党が農業に理解が足りないから、こんな低い米価が議題になっているのだ。大平政調会長などは大蔵省のエリート官僚出であり、農民

生活などを知らぬからこんな事態を招いたのだ。直ちに辞職して、退席せよ」とブチ上げた。

大平政調会長はだまって聞いていたが、こつした論議に愛想が尽きたのか、席を立とうとした。この時、隣の席の田中米価調査会長が腕をつかんで引きとめ、「腹を立てて席を立つ奴があるか。席を立つたら再び戻れないよ」とたしなめた。大平はしばらく一点を見つめてだまっていたが、やがて口を開き次のように述べた。

「両総務は私に、大平は百姓の生活を知らないと言われたが、あなたたち両君とも父君はわれわれの先輩代議士であり、名門の出で、裕福な家庭で育った方だ。それにくらべ私は、讃岐の貧農の倅である。私は少年の頃、夜明けと共に家を出て、山の中腹にある水の少ない田圃を見回ったのち、朝一番の汽車で通学するのが日課であった。家貧しく学費も少なく、給費生として勉強し、漸く大学を終えたのである。このような大平正芳が農業を知らない人といわれることは心外である」。

田中はこの文章の中で、「私の初めて聞いたハラの底にひびく大平君の発言だった」と述べている。この大平発言がきっかけで、総務会の米価の取扱いは、党三役および米価調査会長に一任されることとなった。